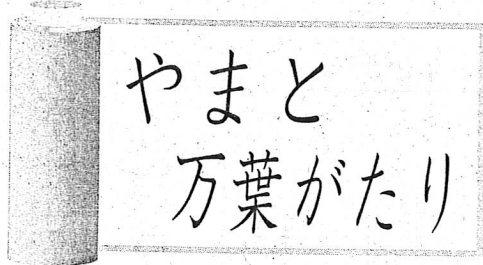


# 春日なる 三笠の山に 月の船出づ

## 遊士の飲む酒杯に 影に見えつつ

何と美しい歌でしょう。私がこの歌と出会ったのは、依頼原稿の関係でお酒の歌を探している時でした。当時、仕事や論文の締め切りに追われてお酒を断っていた私でしたが、この歌のせいにして、すっかり深夜までお酒を楽しみたくなるような美しい響きだったので、たいへん難儀したので覚えていま

ここに詠まれているのは、平城京の東にある三笠の山に出た月。船を思わせるような月が出た、ということですから、三日月から半月くらいのお月様でしょう。丸い方を船底に見立てたとするならば、下弦の月のように思われます。仮にそうだとすると、下弦の月は深夜に東の空に上るものですから、深夜まで三笠山の西の平城京



でお酒を存分に楽しんでいた人たちの歌なのかもしれません。うらやましいことです。さて、奈良時代には、都の風俗が乱れることなどへの対策として、禁酒令が發布されたことがありました。758(天平宝字2)年には、良からぬ者たちが集まって国家を批判したり、酔い乱れて節度

作者末詳(巻七・二二九五)

をなくした者たちがけし、猟奇的な殺人事件なんかをしたりするなどの理由から、祭祀や病氣などの限定的な場合「続日本紀」には記しにしか飲酒が許可されなくなりました。この録されています。このままです。それから3年後では、確かに都の秩序の天平宝字5年には、葦原王という人物が酒令が必要だったのか酒屋で酔っ払って逆上

五番歌を歌った人たちのように、風雅にお酒を楽しむ「遊士」ばかりではなかったようです。

いよいよ師走。今月は日を追うごとにお酒を飲む機会も増えていくことでしょう。お酒に飲まれて乱闘などを起こさず、夜空のお月様を愛でられるような風流な酔い方をしたいものです。

(県立万葉文化館主任 研究員・吉原啓)

|| 次回18日

【訳】春日の三笠の山に船のような月が出た。風流な人々の飲む酒杯の中に、映って見えながら。

# 如何ならむ 名を負ふ神に 手向せば

## わが思ふ妹を 夢にだに見む

柿本人麻呂歌集(巻十一・二四一八)

今年もあとわずかとなりまして。年末年始は楽しい行事が白白押しですが、私は正月の初詣を毎年楽しみにしています。古代には初詣という風習はありませんが、自分の力ではどうにもならない願いを神様に祈るとい行

性の嘆きの歌です。この歌は、一体どんな名前の神様にお供え物を手向けをお願いしたなら、私が恋い慕う彼女を夢にだけでも見ることができのうか、という非常に切ない内容の恋歌です。

為は、古代も現代も変わらないようです。今回の歌は、まさに恋愛成就を神様にお願ひしようとする、とある男

やまと  
万葉がたり

む名を負ふ神」なのかを話題にしているのです。それは、神様に向けて「手向」、すなわちお供えをする必要があるからです。現在の祝詞でも、神主さんが神様の名前を申し上げてから祈願内容を読み上げるのと、仕組みは同じです。

ただこの作者は、願いを訴える神様の名前

【訳】何という名を持つ神に手向けしたなら、私が恋い慕う妻を夢にだけでも見られるのだから。

まり、恋は神でさえも自在にはならない苦しみと葛藤の中にあり、それを乗り越えてでも手に入れたい、かけがえのないものであった、ということだと思います。恋歌は、万葉びとたちが人と人との心のつながりに大変な価値を見いだしていたことを教えてくれる、貴重な遺産であると私は思います。  
(県立万葉文化館主任 研究員・大谷歩)  
次回回は1月15日